スクールカウンセラーだより　No.10

SHONAN GAKUIN HIGH SCHOOL

令和４年２月　スクールカウンセラー　中野隆治

「冬について」

冬というと、木枯らしが街角を吹き抜け、コートの襟をたてながら、マフラーをしっかり巻き付けて歩く人達の姿が思い浮かびます。冬はどうしても、静かに黙々と歩く人達を想像してしまうのです。

どんよりと曇った空、いつのまにか降り積む雪、車の騒音も、人々のざわめきもかき消された静かな街のたたずまいが浮かんできます。その中を心もとなげに足元を見つめ、ひたすら歩く人達。朝の見慣れた風景です。

もちろん、それぞれの生活の場につくと、人々は日頃の自分に戻り、それぞれの生活を生きるはずです。ただ、心の中に、どこか、朝見かけた冬の情景が、そっと忍び寄っていることに、時々気付くことがあるかもしれません、冬とどう付き合えばいいのか。

もちろん、詩人・彫刻家高村光太郎(たかむらこうたろう)のように、（冬よ／僕に来い、僕に来い／僕は冬の力、冬は僕の餌食(えじき)だ「冬が来た」）と、冬に向かって闘争心を露(あら)わにする人達もいるでしょうが、ほとんどの人は、やがて降る雪の様子を自分の心象に同化してしまうのではないでしょうか。

こんな詩の一節があります。

雪は　一度　世界を包んでしまうと

そのあと　限りなく降り続けねばならない

純白をあとからあとからかさねてゆかないと

雪のよごれをかくすことができないのだ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　（吉野弘(よしのひろし)「雪の日に」）

降り続く真っ白な雪が、まるで人間のこの世の汚れを消してくれるように感じる人もいるのではないでしょうか。純白の雪は、汚れを消していくために、降り続いて行かねばならないと。

人は冬になって、他の季節より、部屋の中で自分と向き合う時間が増えるはずです。そして、思い決するのです。冬の中に出て行こうと、冬の中の自分を生きて行こうと。

冬に抗して意気込むのではなく、冬に気圧(けお)されて尻尾(しっぽ)を巻いてしまうのでもなく、冬と仲良くなり、冬の張りつめた肩をたたき、ともに歌い合うような生き方をしてほしいと思います。